

# 戦場を駆ける闘神（インドラ）

シュウナ・アカネ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アホで間抜けで大馬鹿野郎の主人公、甚内哲二が、民間軍事会社を通じ成長していく物語である。

# 目次

物語の設定	1
作戦1・日本一アホな男	3
作戦2・初戦場と言いつつの初恋	7

## 物語の設定

西暦2115年、世界を股に掛ける民間軍事会社、マーキュリー・メビウス社でのこと。入社試験ギリギリで通り、アホで後先考えない男、甚内哲二（じんないてつじ）の成長を描いた物語である。

マーキュリー・メビウス社とは

世界最大級の超大規模民間軍事会社。敷地が縦8キロ、横15キロ。陸、海、空のすべてが揃っている。ただ唯一珍しいのは、銃を主に使う自衛隊型の軍事施設・近代派と、近接攻撃に向けた拳銃、刀、脇差などの接近戦が主な軍事施設・古典派がある。この会社の従業員数は10万人を超える。そして、Eランク、Dランク、Cランク、Bランク、A Bランク、Aランク、S Aランク、S Sランクに分かれている。（両方の軍事施設とも）Eランクが最も低く、S Sランクが最も高い。そして、この会社の1年間の活動費は、国家予算の約142%になるといふ。

〜人物紹介〜

甚内哲二（じんないてつじ）

かなりアホな男。古典派・Eランク所属。とにかくお調子者で、仲間からは危険人物と言われている。幼稚園の頃に両親を亡くし、それから祖父母に養ってもらっていた。人付き合いが苦手で、初対面の人には決して自分から話しかけない。高校時代はバドミントン部所属。特に結果は残しておらず、ほとんどが一回戦負けしている。

アホだが、仲間が倒れていたら、男女問わず応急手当を施すなど、仲間を思いやる気持ちは強い。しかし、古典派の中では最下位で、最も弱いと言っている。

〜組織紹介〜

## 近代派

主に長銃や狙撃銃など、遠距離攻撃に特化した組織。飛行機のパイロットなどもこの組織の分類に入る。頭のいいエリートが集まるが、古典派の方が実力は上である。

## 古典派

拳銃、ナイフ、刀、脇差、スカウトナイフなどを行使し、接近戦で類を見ない強さを誇る組織。この組織は、近代派を受験して落ちたものや、成績の悪かったものが流れてくるような場所である。だが、古典派の方が近代派よりも実績は上である。

## 〈部隊紹介〉

### 第一古典部隊

近接攻撃のエキスパートの集まり。巧みなコンビネーションで相手を翻弄し、次々と標的の命を奪っていく。例えなら、一人一人の実力が、メタルギアのスネーク以上の実力を持っていると思っただが、1度の作戦で死ぬ人数は少なくない。

### 第一近代部隊

長銃からの狙撃がメインの部隊。1班2人ずつで行動し、ギリギリスーツなどで姿を隠し、敵を確実に葬る。この部隊の入隊条件は、弾数1発で、2500メートル離れたところから、幅30センチの板を誤差20センチ以内に撃ち込むこと。

## 作戦1・日本一アホな男

とうとう来たか、俺の社会人生活が！

「マーキュリー・メビウス社、今日からお世話になります！」

1ヶ月後……

「……まじかよ」

俺、甚内哲二（じんないてつじ）が見ているものは、社会人になって初めての初の給料だった。

「初任給で、24万8000円だとおおおおお!!?」

初任給で約25万円という大金を手にした俺は、テンションがかなり上がっていた。だが他の社員は、

『やったー!!35万円だー!!』

『あまいな！俺なんて40万超えたぜ!』

みんなが俺よりも金額高いなんて、差別という名の差別なのか!?!? こんなことを考えていたら、後ろから誰かが話しかけてきた。

「お前、なんでそんなに給料低いんだ？」

俺の同期で幼馴染の男、汐見琉鵜鹿（しおみるうか）だった。

「じゃあ琉鵜鹿の給料はいくらだよ！」

「え？ほら、見てみ」

え？封筒の中に少なくとも札が50枚以上あるんだけど。

「えーと、これは差別なのか？」

「お前は真面目に仕事をしなかったからだろ。近接戦闘の訓練でも一人だけサボってるしデスクワークもまともにしないし休み時間も爆睡して結局起きないじゃないか」

ドスツ！ドスツ！

言葉の刃が胸に突き刺さる。まあ確かに真実だ。

「給料を上げたければ訓練も仕事も真面目にするんだな、ははは」

そう言つて琉鵜鹿は去っていった。

「ムキー！本当のことばつか言われて何も言い返せなかったじゃんかちくしょー！」

琉鵜鹿は成績トップで近接戦闘も上位に入る。言うなればエリートだな。それに比べ俺は成績は最下位、近接戦闘も最下位。いわゆるこの組織、古典派の恥晒し。あいつは何もかも上手く行くからいいけど俺は何もかも失敗して結局諦めてしまうタイプだからな。

「でも給料ももらえただけいいか！ヤッフーウ！」

こんなことを言つて、自分の気持ちをごまかす。正直、ビビっている。クビになることを。

(家に帰ったら、久々にエアガンを買に行くか！)

こう見えて俺はエアガンが好きだ。え？君は嫌いだって？あはははは！知るか。俺は、刀やナイフなどの刃物も好きだけど、エアガンが一番かつこいい。なんてゆうかこう、ミリタリー感が溢れてるといふかなんというか。たまに自分の腹筋に弾丸を撃ち込んだりするね。つーことで、後で買いに行こう。また後ろから誰か来た。

「あ、戸島（とじま）教官！お疲れ様です！」

「ん？ああ甚内か！今日は初任給の日だな！」

この人、戸島教官は古典派の教官だが結構デタラメな人で、俺よりも頭が逝ってる人だと思う。でも、実力は半端ではない。素手でクマを倒したとも言われている近接戦闘のプロフェッショナル。少し前、琉鶉鹿と模擬戦闘をしていたが、琉鶉鹿が一方的に押されていた。簡潔にまとめれば、まあまあいい人。

5

「戸島教官の給料はいくらだったんですか？」メキメキ「あああまじでごめんなさいごめんなさいお願いですから腕を変な方向に曲げないでー！」

「全く、お前が失礼なことを聞くからだ！んで、いくらだったんだ？」

「24万8000円です、まあ約25万円ですね」

「“約”はいらないだろ、フハハハハハ！」

なんか大笑いしてるし。

「まあいい、お前の働きっぷりにはちょうどいい金額だ！」



「丁度？どこが？」

「おおっと、俺は他の仕事があるんだった。俺はここで失礼するぜ」

「そ、そうですか！ではまた明日！」

「おうー！」

戸島教官は小走りで戻っていった。でも俺、どうなるんだろう？確かに仕事はしなきゃいけないな。

「帰るか。おうちに」

アホ男の社会人デビューは、まだ始まったばかりである。

## 作戦2・初戦場と言いつつの初恋

哲二 side

あの後、俺は会社から出て、サブゲー、いわゆるサバイバルゲームのグッズが揃ってることで有名な店に赴いている。ここは町の中心部。もちろん、それなりの娯楽施設や公共施設などが揃っている。唯一嫌なことは、俺の会社の社員が常にこの町を警備していることだ。理由は簡単で、同じ職場の人間があちこちいると気持ち悪く感じてしまう。

(エアガン買ったらすぐ帰るか・・・いや、久々に外食でもしよう。息抜きもたまには必要だしな)

会社から歩いて15分、そのサブゲーの有名店に着いた。いざ店内に入れば、俺から見れば天国。

「おおお・・・」

思わず声が出てしまう、無理もない。ここにはハンドガン、ショットガン、サブマシンガン、アサルトライフル、スナイパーライフルなどなどもはやない銃はないと思わせるほどの種類がある。

(今まで欲しいのを我慢してた銃が・・・買える・・・)

最高にいい気分というのはこういうことだろう。

「よし！すみません、これくださいー！」

今回俺が買うのは、『US M1 Garand』。『モシン・ナガンM1891／30』に酷似した銃だ。銃身は木製で、なんていうか

骨董品っぽい感じがたまらなくてずっと欲しかった。当然この銃はガスガンなので、お値段は相当な金額だ。

「お値段、54,000円になります」

給料のおよそ5分の1を削る大金が消えたが、全く後悔していない。

「ああ・・・この肌触り・・・この木の匂い・・・この重さ・・・ビューティフオウ！」

はたから見たら変態だが、スルーしてくれ。確かに銃は好きだが、銃は俺の嫁とかいう感じではない。

グウウウ

腹が声を出し始めた。確かにだいぶ腹も空いてきた。

(銃も買ったし、最寄りの飲食店に行くか)

数分後・・・

「いらっしやいませ〜！ご注文は何にしますか？」

「えっと、とんかつ定食をください」

「わかりました、少々お待ちください」

(・・・暇だし、隣の喫煙所にも行くか)

ガタツ

席を立って喫煙席へ行こうと曲がった時、

どんっ！

「うっ！」「きゃー！」

どうやら、店員さんとぶつかったみたいだ。なんかすごく申し訳ない。

「いてて、ごめんなさい店員さん。立てますか？」

「は、はい。大丈夫です」

（っとうお!?？可愛い／＼／＼）

その店員は、おそらく高校生。髪の毛はショートで色はピンク。小柄でも顔は美少女のような顔で、言い表しきれないほど、可愛かった。

「すみません・・・その、仕事終わりのバイトで・・・疲れがたまってしまった」

仕事を終えてからバイトしてるのか。頑張り屋だなあ。

「そうなんだ。頑張るのもいいけど、無理はしないほうがいいよ。体壊すと、元も子もないからね」ニコッ

俺はその子に、笑った顔を見せた。正直笑顔は苦手だが、自分の言葉が伝わって欲しかった。まあ簡単に言えば、元気を出して欲しかった、のかな。

「は、はい！ありがとうございます！そしてあの、ご、ごめんなさい！」  
サササッ

急ぎ足で厨房のほうに帰っていった。そして俺は数本タバコを取り出した。別にイライラしてゐるわけではないからな。だがこのタバコは特殊なタバコで、体に一切の害をもたらないタバコだ。依存性も全くない。美味しくはないが、集中力が増す効果がある。もともと医療目的で作られたタバコであるらしい。

「・・・やっぱ吸いたくねえ、ご飯前に吸うのもおかしいし」

結局席に戻り、料理を待つ。どうやら飯が来たようだ。しかもその飯を持ってきた人が、ピンク髪のあの美少女だった。なんだか今日という日は当たりかもしれない。

「お、お待たせいたしました。とんかつ定食で」ガッ

「え？」

なぜか、つまずいた。そして予想通りの、

ガッシャーン！

地面に落ちればいいものの、俺の体に飯が降ってきた。

「あわわわわわ!??とんかつあつっ！リアルにあつっ！」

ピンク髪の少女を見ると、

「あ・・・ああ・・・」ガタガタッ

肩をすぼめながら、震えていた。涙目になって。

「店員さん！とりあえず濡れた台拭き持ってきて！」

「あ、は、はいい！」

2分後・・・

「ふうー、なんとかなつたー」

俺の服にかかってこぼれた飯は全部回収して服も拭いたが、あの少女、店長に怒られてる。厨房自体がガラスで見えるようになってるので、声も漏れてくる。

『お前今日で何回目のミスだ！ああ！？大体よお、醤油と酢を間違えるってなんだ！？そんなミスすんなら、うちの店にはいらねえよ！』

こんなことを公衆の面前でいう店長もむかつく。確かに彼女のミスも多い。でも、店長も人として成り立っていない。いや、人間以下だ。そして少女以外の店員もニヤニヤしてむかつく。

『ご、ごめんなさい、次は気をつけますので・・・』

バシイ！

『きやつ!!?』バタン！

顔を叩いたようだ。そろそろ我慢ならん。店長をぶっ飛ばしたい。だがそんなことしたら会社をクビになるのはもちろん、警察にもお世話になってしまう。でも彼女の頬は、赤く腫れ、涙目で、口からは少量の血が出ている。



「吹っ飛ベクソ野郎があ！」

ゴワシヤ! 「かぺっ!?!?」

俺はクビや逮捕の恐怖よりも、その店長を殴り飛ばし、少女を助けることを選んだ。

「ピンク髪の店員さん、外に出よう。ここの店にいる人たちは君の心の傷を残すことになる」

ピンク髪の少女を安全な場所へ連れていくために、声をかけた。でも、

「もう・・・いいんです・・・人生なんて・・・何にも、楽しくないんです・・・」

声がかたかたを震えた感じだった。店長からの中傷的な言葉は、かなり少女を傷つけたようだ。自分の誇り、存在意義さえも、ズタズタにされた。でも俺は、

ガシツ

「!!」

少女の肩を優しく掴み、手を差し伸べた。

「えっ・・・」

「確かに、今の時点で誰よりもひどい目にあつたことはわかっている。でも、簡単に人生は楽しくないなんて言わないで欲しい。この世界は嬉しいこともあれば悲しいこともある。君が傷つくようなことがあ



れば、全力で君を守る！だから、外に出よう」

「！・・・はい」

彼女は泣きながら承諾してくれた。この店を後にして、自分の家へと向かう。

10分後・・・

自宅に到着。今日は色々とあつて疲れたが、銃は手に入れたから満足。でも問題は、少女だ。

(まさか俺の家に来るなんて言うとは思わなかったな)

彼女によると、一人息子がいるらしい。彼女がヤリマンだと信じたくはないが、驚きはする。

ピンポーンッ

ガチャ「お邪魔・・・します」

彼女が来たようだ。荷物の量は、なかなかの物だ。

「入って入って！ごめんね、こんな部屋で。とりあえず、傷口の消毒しない」と

こんな部屋ってどんな部屋なのかというと、壁一面にサブゲートの銃が飾ってあり、和室には切れ味抜群の本物の日本刀が置いてある。女子なら完全に引くシユチュエーションだが、

「すごい・・・ですね」

彼女の顔は、感心の顔だった。

「え？こういうのって、好きなの？」

「はい、銃には少し興味がありますよ」

女子にも銃に興味のある人は少ないわけではないが、さすがに部屋の壁中に銃を飾ってあったら引くであろう。しかし彼女は少し変わったっている。

「そういえば、君の名前はなんていうの？」

「星野（ほしの）ヴィヴィアンっていいます・・・名前が少し変なので、なんかごめんなさい」

「なんで謝るのさ！覚えやすくてわかりやすいし、可愛いじゃないか！」

「あ、ありがとう・・・ごさいます／＼／＼」

彼女が照れた顔を見せる。マジで可愛すぎる。あ、やばい、鼻血出そう。

「ま、まあとりあえず傷口の消毒が先だね、救急用のアタツシケース持ってくるから待ってて」

普通アタツシケースに入れないが。

ブーツ　ブーツ

「ん？携帯か？ええつと、会社から？」

ガチャ「もしもし」

『哲二！今どこにいる!?』

「ん、琉鵜鹿じゃん。どこって、自宅だが？」

『なら良かった、急いで会社に戻ってきてくれ！まずいことになってる！』

「どうしたんだそんなに血相あげて」

『国籍不明機が俺らの軍事会社を攻撃している！あと会社の防壁も、国籍不明の地上部隊によって破壊された！』

「はあ!?？わかった！俺も会社に行く！」

『頼んだぞ！』プツツ

(なんでうちの会社が侵攻されてるんだよ、アメリカ空軍の15倍以上ある戦力が押されているということなのか?)

ゴオオオオオオオオオ!

「うわっ!??ああもううるさいなこのターボエンジンの音!どんな機体だよ!」

ガラッ!

窓を開け、空を舞ってる戦闘機を見つける。尾翼にペイントされた

紋章に、覚えがあった。

「あれは……」ラビリンス航空隊……？まさか、国籍不明機って……」

ダツ！

俺はすぐさま走り出した。一刻も早く会社へ行かなければ。

「ごめんヴィヴィアンちゃん！ちよつと用事ができたから会社に行つてくるー！」

「そ、そうですか。わかりました、行つてらっしゃいませ」

玄関を出て、会社に一直線に走る。ラビリンス航空隊は、単なる攻撃では倒せない。彼らが載っている戦闘機は、特殊な作りでできている。そもそもなぜ俺がラビリンス航空隊を知っているかという点、昔の話になるからやめよう。

ブーツ　ブーツ

『哲二！まずい！敵が施設内に侵入！瞬時に建物の5パーセントは制圧された！』

「はええよもうちよつと粘れよ！俺はバカだからお前らが抑えとけ！」

『航空機や地上兵器の座学ならお前は成績いいだろ！だから早く頼む！』

「OK！猛ダッシュで行く！」プツツ

やっぱり、座学より実践の方が、怖い気がする。生まれて初めて、死にたくないと思った。ヴィヴィアンちゃんが好きだから。ヴィヴィアンちゃんのために俺は生きる。

(生きて帰ったら、ヴィヴィアンちゃんに想いを伝えよう)

心に、そう誓った。

#### 次回予告

ラビリンズ航空隊と地上部隊、彼らの狙いはそもそもなんなのか。土地か、財産か、それとも他の何か。全ては次の投稿で！